

率の低下の緩やかさであるが、この25-29歳群ではそれがより強くみられている。20歳代後半においても性交未経験率は20%近くを保ったままのラインであることがわかる。生涯にわたる性交未経験者が1970年（前後の5年間）生まれ群以降に増加しはじめたといえる。

図5に25-29歳群と20-24歳群との比較を示した。検定（Log Rank）の結果は有意であったが、これはこれまでの組み合わせとは全く逆に、20-24歳群の性交未経験率の減少が20歳までより緩やかだったことを示している。すなわち、20-24歳群において、低年齢化は止まり、さらには高年齢化の方向に有意に動いたことを示している。

また、30-34歳群以降に観察される性交未経験率の低下の緩やかさであるが、この20-24歳群においては、20歳をすぎたところで、ほとんど低下しなくなっていく傾向さえうかがえる。性交未経験者が20歳代中盤で増加していることが推測された。

図6には20-24歳群と20歳未満群との比較のグラフを参考までに示した。

2. 男性のみの解析

男性のみをとりあげて、さきほどと同様の年齢階級の組み合わせの検討をおこなった（図7～図12）。

検定（Breslow）により、その上の世代と比較して有意な低年齢化がみられたのは、35-39歳群（ $p<0.05$ ）であった。また、視覚的検討（ラインが交差している）から低年齢化がみられたのは、男女合わせた解析と同じく、25-29歳群であった。

また、30-34歳群以降には、男女合わせた解析と同じく、性交未経験率の減少が緩慢になる傾向がみられていた。若い男性にも、生涯にわたる性交未経験者が増加すると予測された。

3. 女性のみの解析

女性のみをとりあげて、さきほどと同様の年齢階級の組み合わせの検討をおこなった（図13～図18）。

検定（Breslow）により、その上の世代と比較して有意な低年齢化がみられたのは、40-44

歳群（ $p<0.01$ ）であった。また、視覚的検討（ラインが交差している）から低年齢化がみられたのは、男女合わせた解析・男性のみの解析と同じく、25-29歳群であった。さらに、検定（Log Rank）により、高年齢化がみられたのは、20-24歳群（ $p<0.05$ ）であった。

また、30-34歳群以降には、男女合わせた解析・男性のみの解析と同じく、性交未経験率の減少が緩慢になる傾向がみられていた。若い女性にも、生涯にわたる性交未経験者が増加すると予測された。

累積性交経験率の検討

10代の各年齢時点における性交経験率を算出する際にも、打ち切りデータを考慮した解析が必要である。図19～図20に、10代の各年齢時点における、年齢階級別の累積性交経験率をあらわした。なお、10代の各年齢時点における「完結」性交経験（有無・率）が算出できない20歳未満群については解析から除外した。

男性と女性をあわせてみる（図19）。最若年層である20-24歳群の累積性交経験率が他の年齢階級よりも高かった年齢時点は、1時点あり、それは17歳時点であった。16歳時点までは、20-24歳群は、25-29歳群よりも低率を示しており、その率は30-34歳群と同じレベルになっている。

18歳時点でもっとも累積性交経験率が高かったのは、25-29歳群であった。19歳時点では、35-39歳群であった。

男性のみを対象としてみる（図20）。最若年層である20-24歳群の累積性交経験率が他の年齢階級よりも高かった年齢時点は、1時点あり、それは17歳時点であった。16歳時点までは、20-24歳群は、25-29歳群よりも低率を示しており、その率は30-34歳群と同じレベルになっている。15歳時点では、30-34歳群よりも低率を示している。

18歳時点でもっとも累積性交経験率が高かったのは、35-39歳群であった。19歳時点では、同じく35-39歳群であった。

女性のみを対象としてみる（図21）。最若年層である20-24歳群の累積性交経験率が他の年齢階級よりも高かった年齢時点は、1時点もなか

った。すべての年齢時点において、20-24歳群は、25-29歳群よりも低率を示していた。

14歳以降、19歳時点まで、もっとも累積性交経験率が高かったのは、25-29歳群であった。女性の25-29歳群は他のどの世代よりも低年齢から多くのものが性交にいたっていたことがわかった。

性交経験年齢の分布の検討

各年齢階級における性交開始がどれほど集中していたのかをみるために、分布（尖度）を算出した（図22）。ただし、性交経験者のみが解析対象である。

男性における尖度は30歳以上の群においていずれも高い値を示していた。とくに40-44歳群においては、尖度は10を超えており、多くのものが集中して性行動を開始したことが推測される。性行動の「山」があったといえる。29歳以下の男性においては、そのような「山」は尖度からは伺えない。

女性における尖度は男性に比べてかなり低い値を示していることがわかった。

IV. まとめ

性の低年齢化・高年齢化について

上記の解析を通じてわかったことを以下に示す。

(1) 1960年前後生まれ世代、1965年前後生まれ世代に（性交開始年齢からみた）性の低年齢化がみられていた。

(2) その後、低年齢化は一旦止まった。

(3) 1975年前後生まれ世代（バブル期に思春期を通過し、援助交際という言葉を生んだ世代）に再び低年齢化がみられた。

(4) その後は、逆に性の高年齢化といえる方向に動いていることがわかった。

(5) 男性では、中学生年代までは、1975年前後生まれ世代の低年齢化が突出していた。その後、18歳（及び19歳）時点には、1965年前後生まれ世代がもっとも累積性交経験率が高くなっていた。思春期後期から青年期入り口にかけての性交経験率が最近ではかなり低下してきていることが読み取れた。

(6) 女性では、10代の各時点で、1975年前後

生まれ世代の低年齢化が突出していた。

性交未経験率の減少傾向について

上記の解析を通じてわかったことを以下に示す。

(1) 男女ともに、1970年前後生まれ世代以降、20歳前後からの性交未経験率の減少において、特徴的な現象がみられた。上の世代でみられていた0%近くへの収斂が期待できないライン（閾数）を示していた。

(2) この減少傾向の緩慢については、最近の世代になるほど、その傾向を強めていることがわかった。

性のリスク低下と性のプロモーション

今回、日本人の性行動を生存分析等の統計解析してみたところ、以下のことが示唆された。

(1) 性（行動）のリスク低減にむけた対策は、確かに重要ではあるが、それに隠れて一方で、性行動から遠ざかるものの存在が無視できないほどのものになってきていることが伺えた。少子化に直結する新たに観察された現象といってよいだろう。今後は、性（行動）のプロモーションについても、関係性の構築のためのコミュニケーション力を涵養するなどの対策が必要だと考えられた。

(2) 昨今の思春期の性の問題は、低年齢化という「量」が問題だったわけではないことがわかった。「量」は減少している（低年齢化とは逆方向にある）にもかかわらず性の問題が顕在化しているという謎解きは、実は若い世代における性行動の「質」が変化したのではないかという見方を提出させる。性の健康教育の戦略も量への対応から質への対応へと変更が求められている。

(3) 性の問題を増大させることと、性行動から遠ざかるものを増加させることに共通する因子は何かを検討すると、そこに「性の敷居（特別視）の低下」という「質」の変化が推測される。性の敷居が低いという「質」は、一方で、予防的な行動も防御的な行動もあるいは相手との関係に関する嗅覚も低下させる。また、同時に性への関心を低下させ、また性への興味をもたささない。

(4) 男性用コンドームの出荷数が減少していることが知られているが、これまでは「装着するものの割合が少なくなった」「装着率が低下した」などの仮説が考えられていた。本研究からは、性行

動が低年齢化とは逆の方向にあり、また、性から遠ざかるものが増加しているからだという仮説も考えられる。「男女の生活と意識に関する調査（2004年度）」から、コンドームを用いる日本人が決して少なくはないことが知られていることも、この新しい仮説を補強するものだろう。

（5）学校で性教育にあたる教職員のほとんどは、若年層における性の低年齢化を信じている。今回の解析でわかったことは、教職員の最大多数派（文部科学省調査）である40代という世代の特殊性である。男女ともに、40代の世代は低年齢化（あるいは次の世代が低年齢化）を経験し、また、男性にあっては、ほぼ同時期に性行動に乗り出していったことがわかっている。また、この世代の特長はほとんどすべてのものが30歳には性交を経験していたという世代である。これらの特長は今の子どもたちの特長をバイアスなしに把握するための障害となっている可能性が高い。

図1. 45歳以上群と40-44歳群

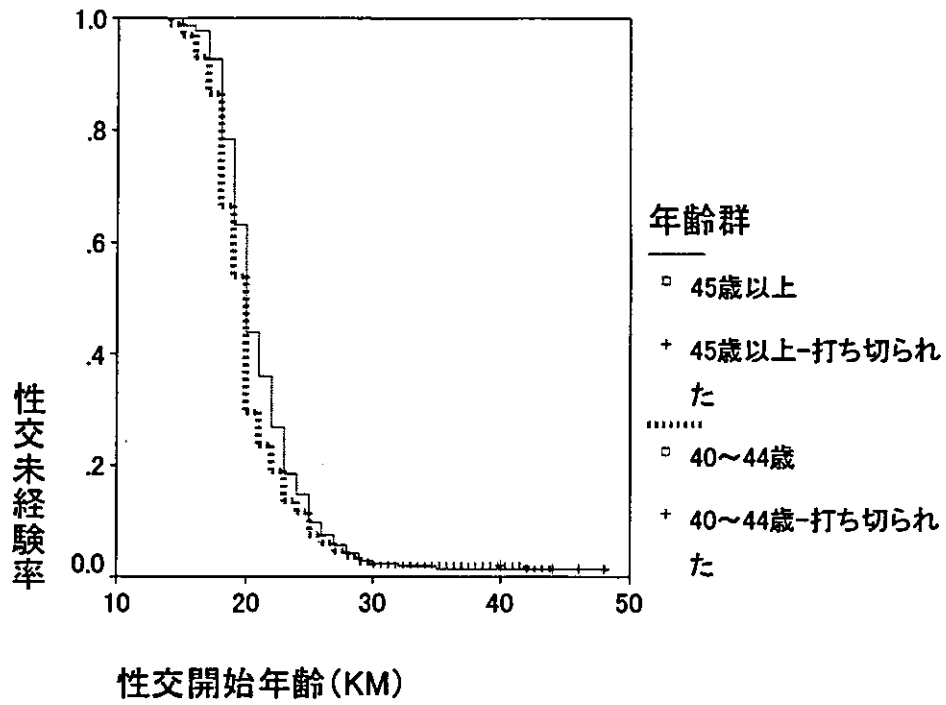


図2. 40-44歳群と35-39歳群

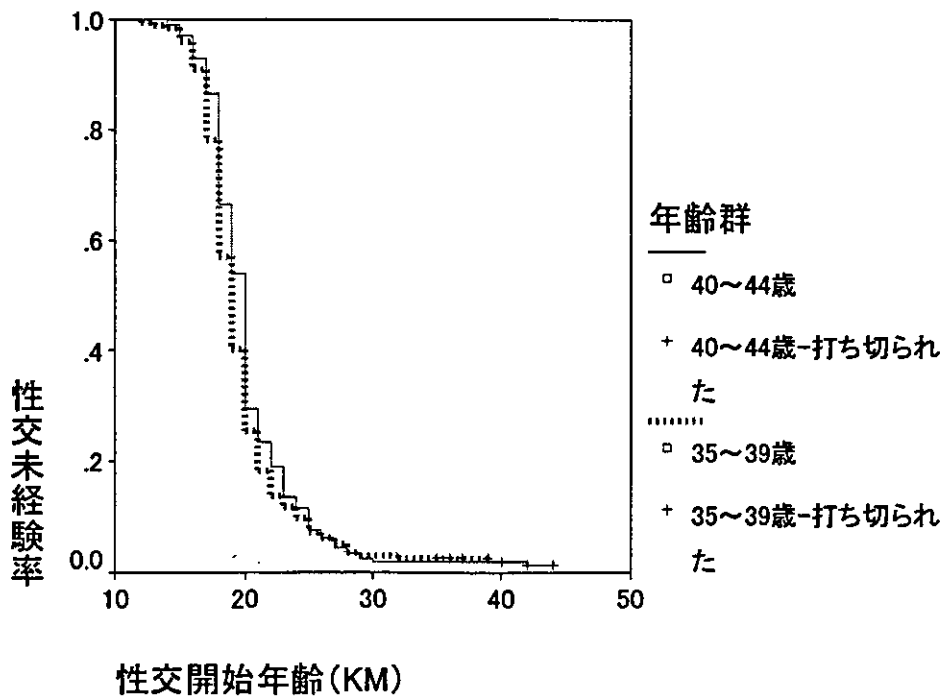


図3. 35-39歳群と30-34歳群

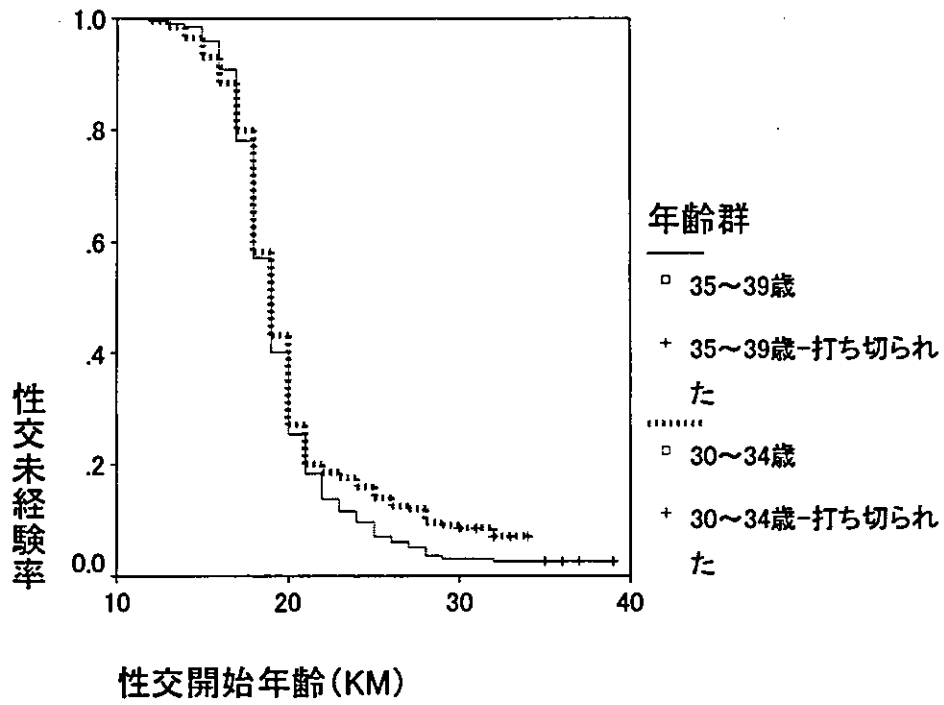


図4. 30-34歳群と25-29歳群

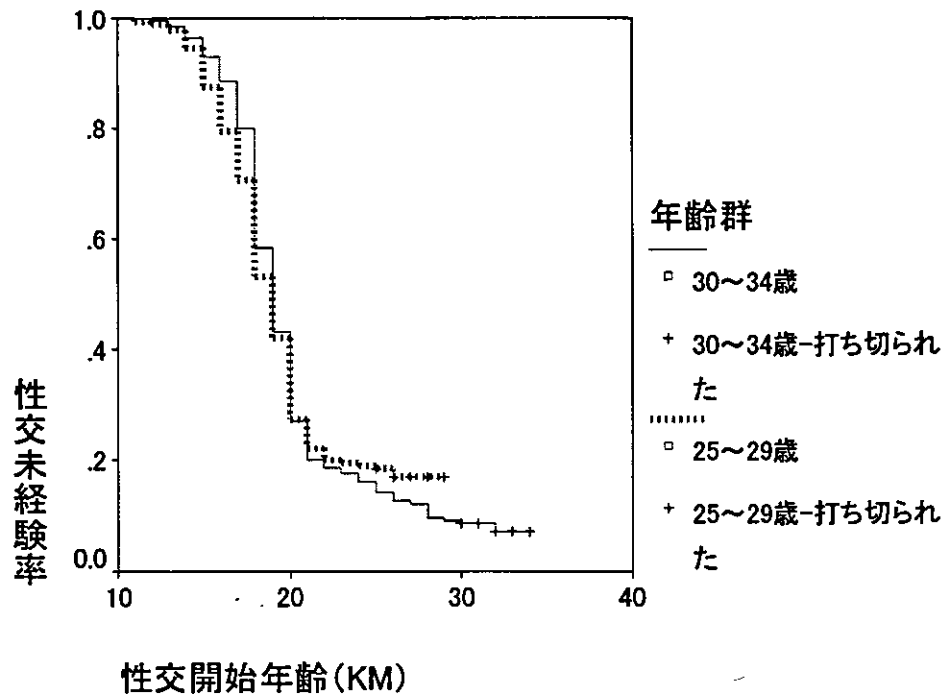


図5. 25-29歳群と20-24歳群

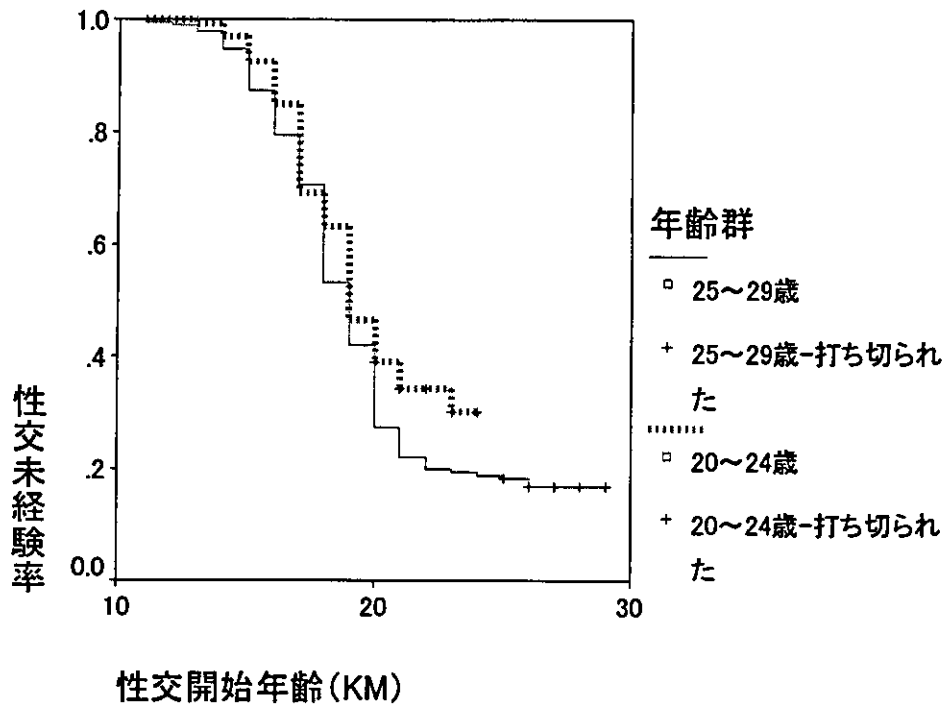


図6. 20-24歳群と20歳未満群

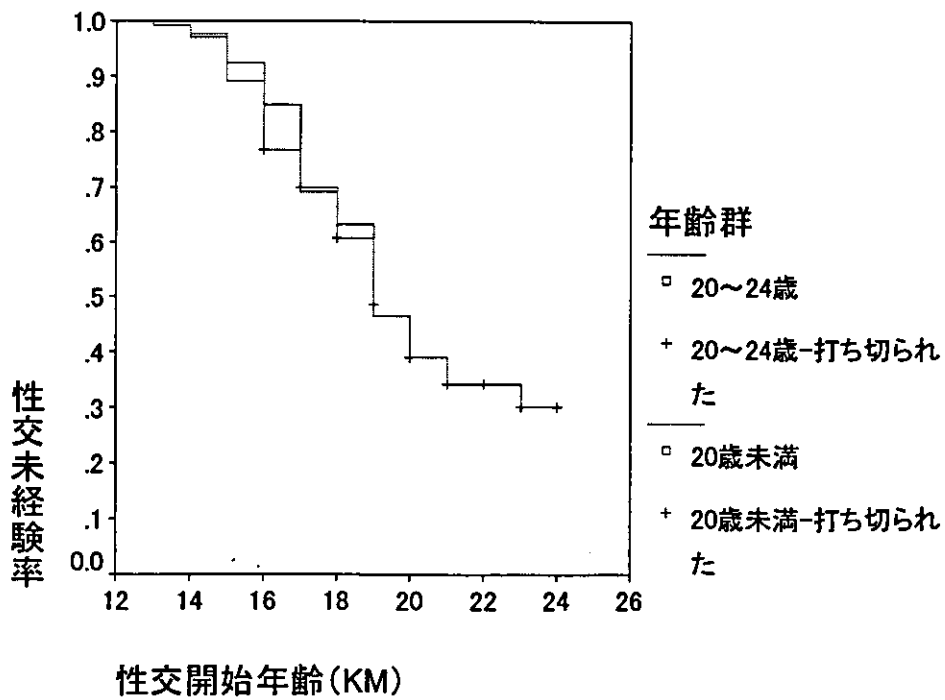


図7. 45歳以上群と40-44歳群

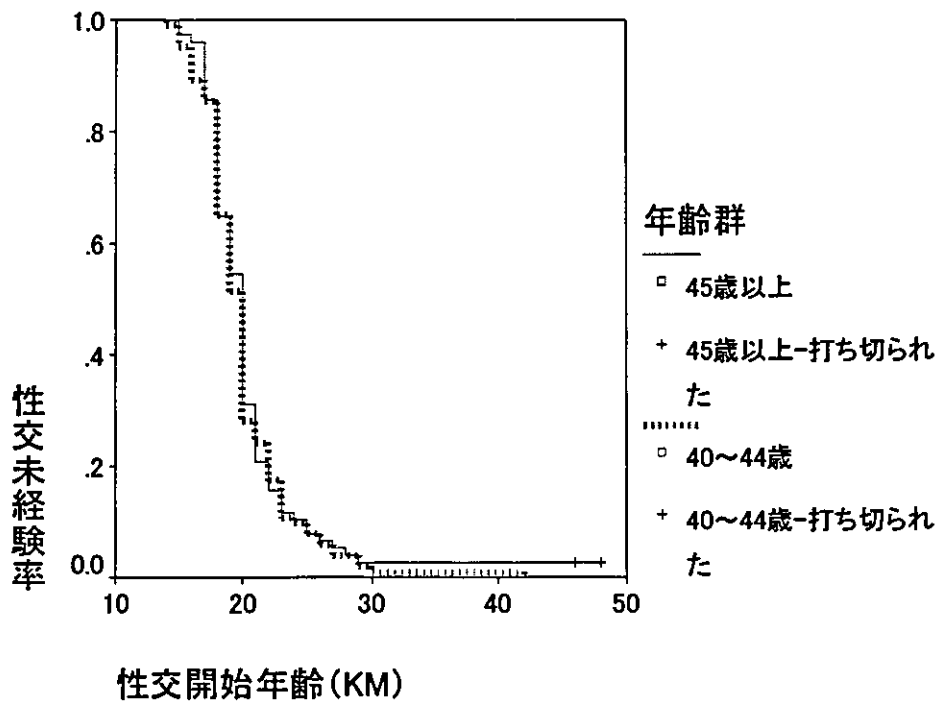


図8. 40-44歳群と35-39歳群

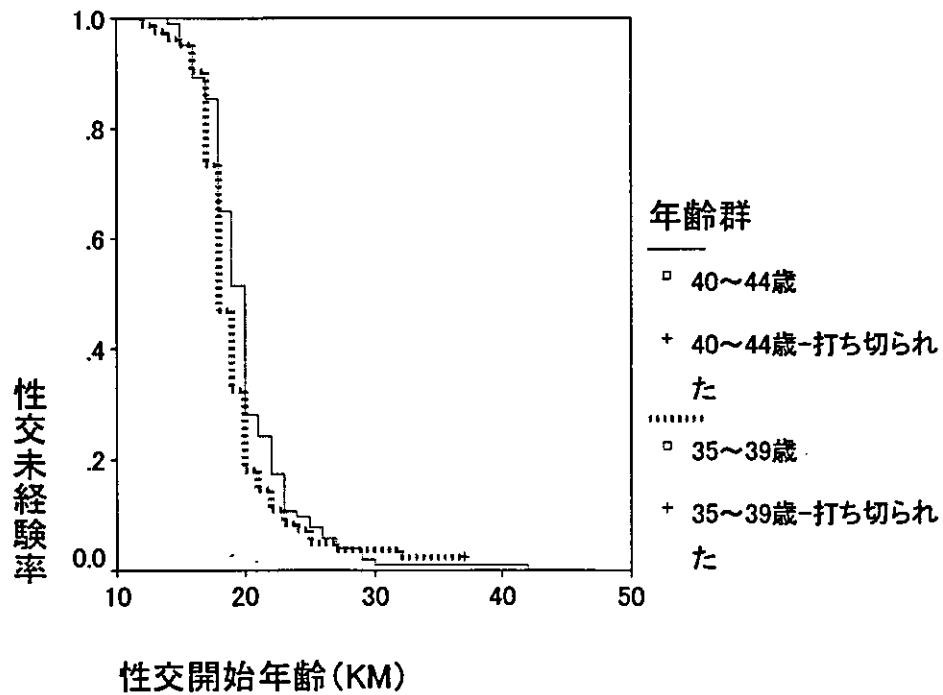


図9. 35-39歳群と30-34歳群

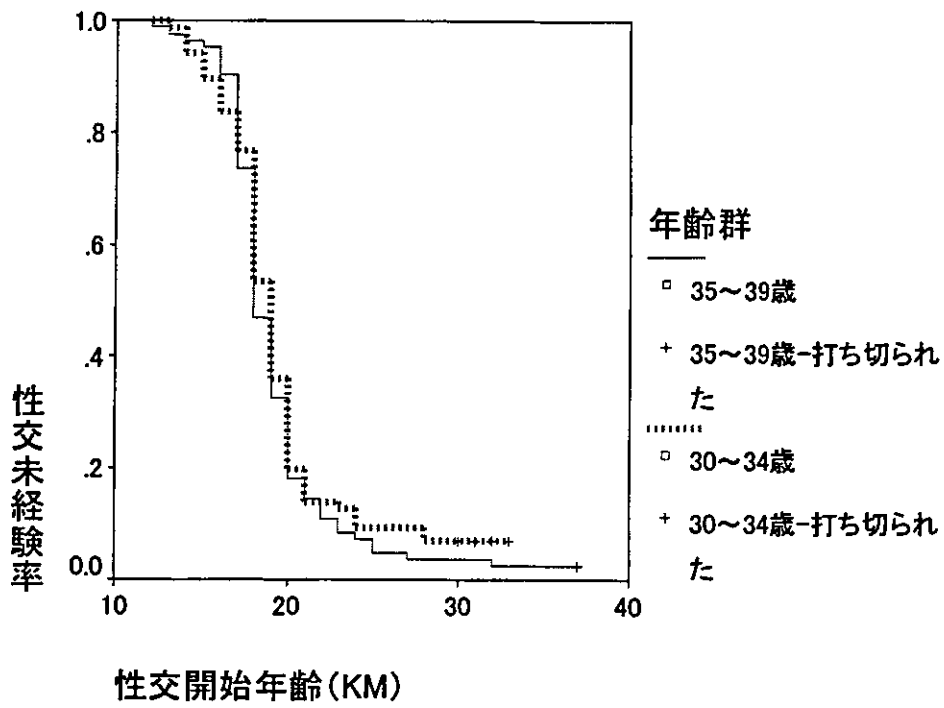


図10. 30-34歳群と25-29歳群

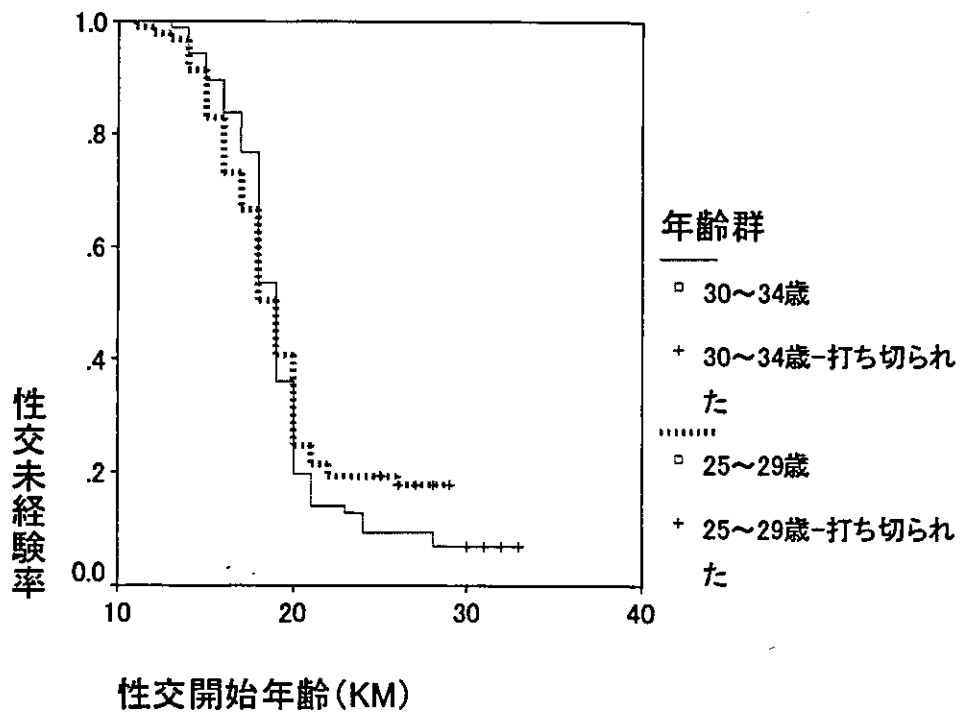


図11. 25-29歳群と20-24歳群

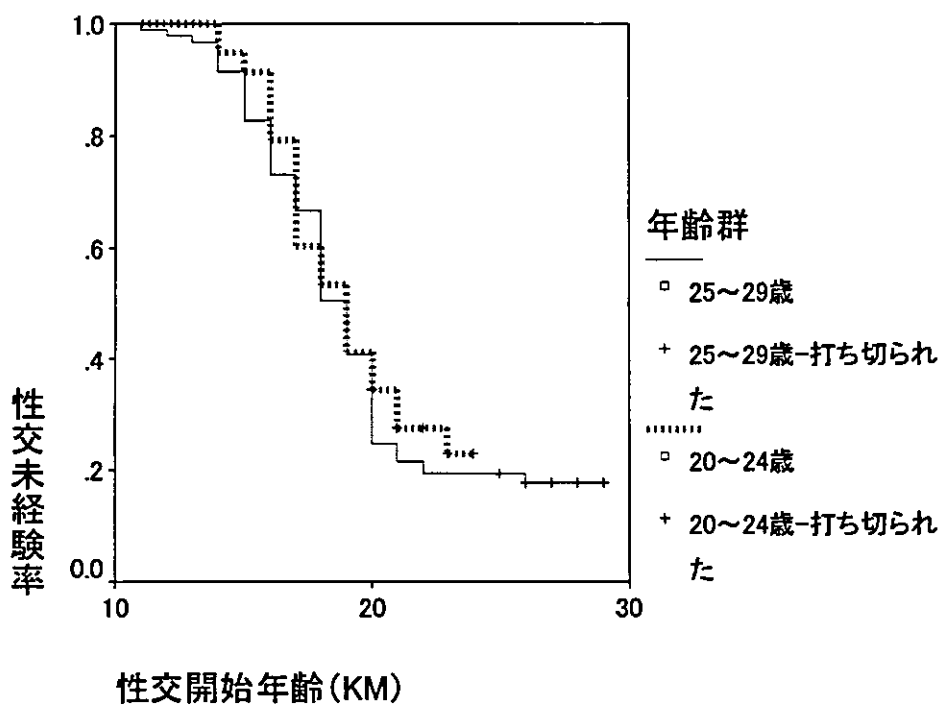


図12. 20-24歳群と20歳未満群

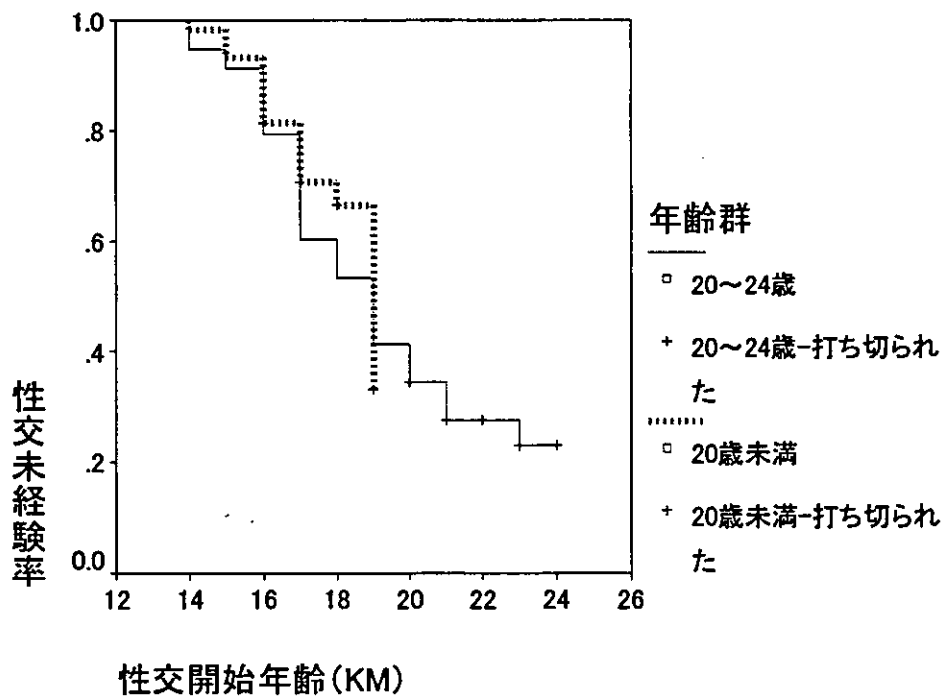


図13. 45歳以上群と40-44歳群

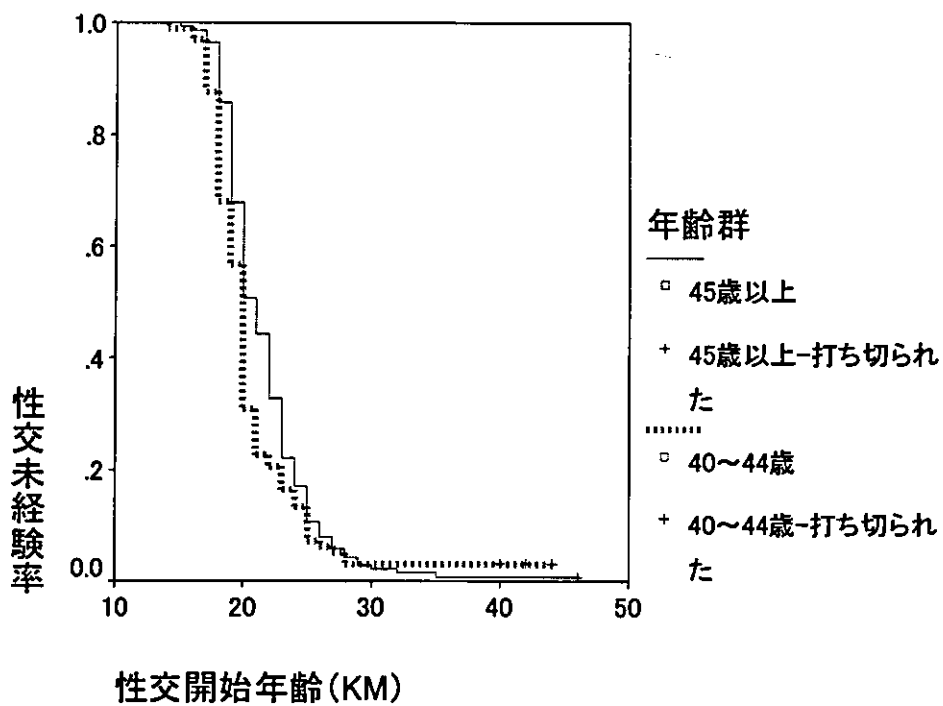


図14. 40-44歳群と35-39歳群

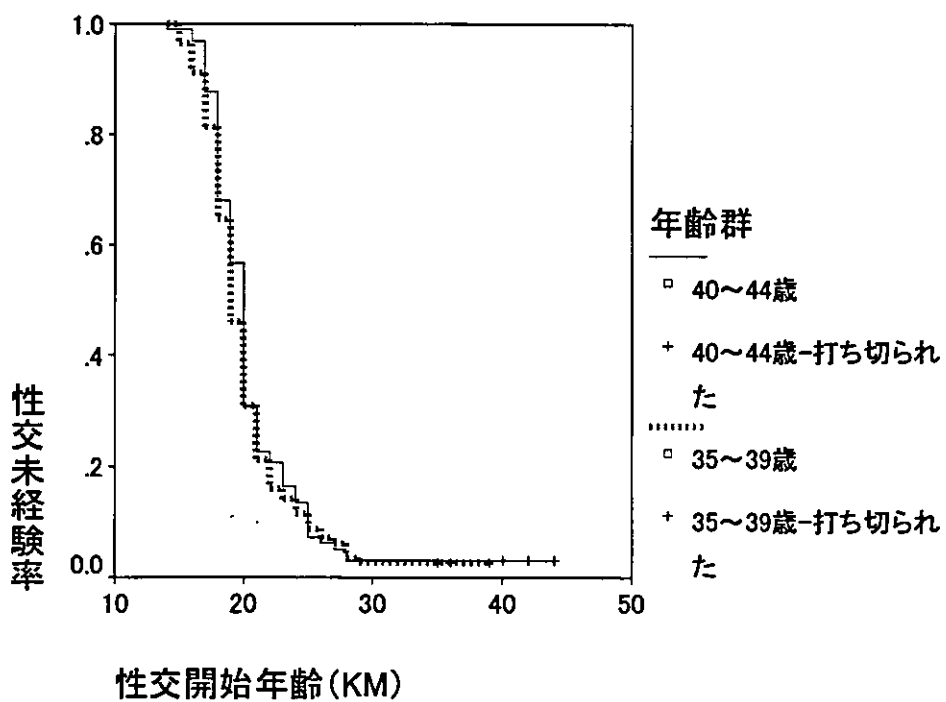


図15. 35-39歳群と30-34歳群

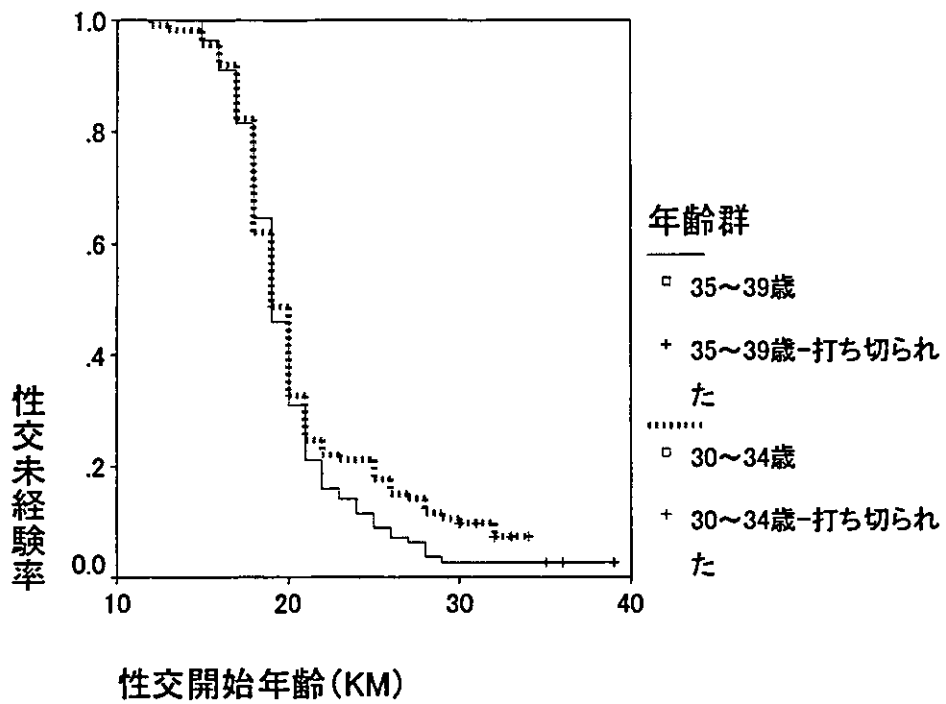


図16. 30-34歳群と25-29歳群

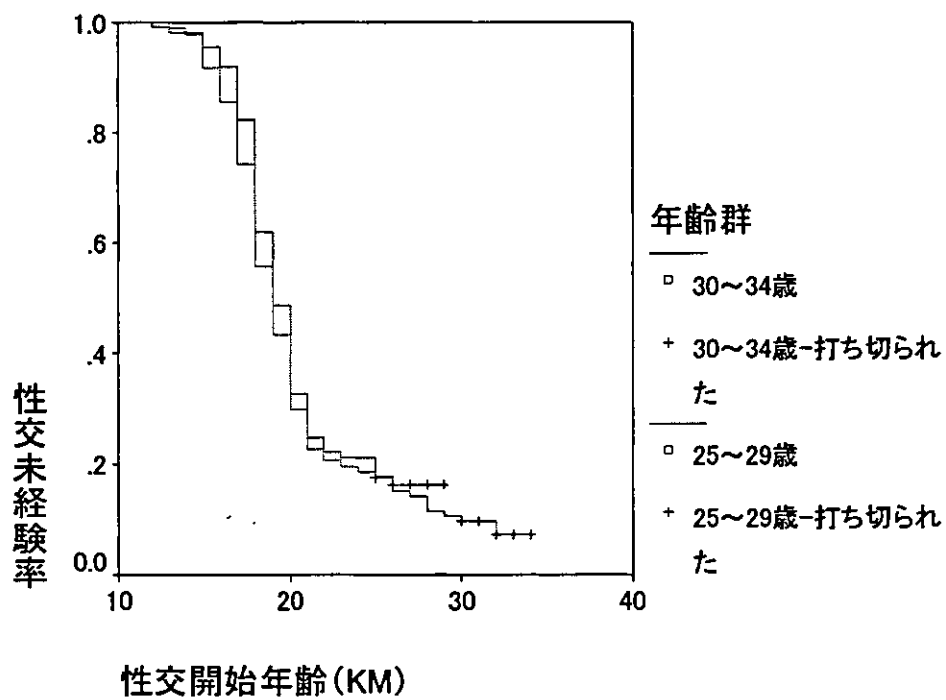


図17. 25-29歳群と20-24歳群

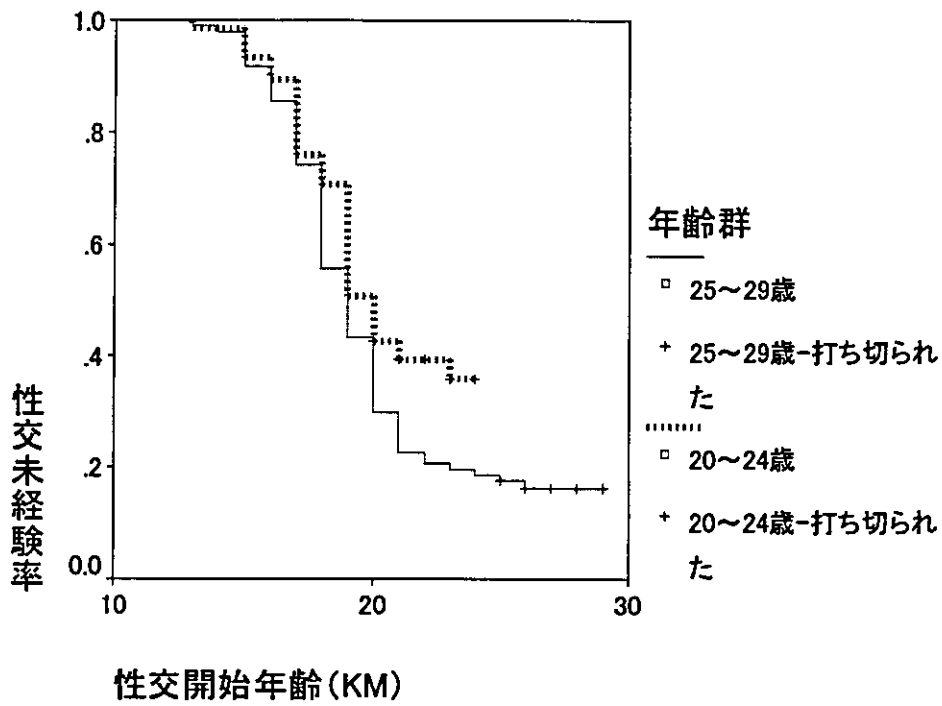
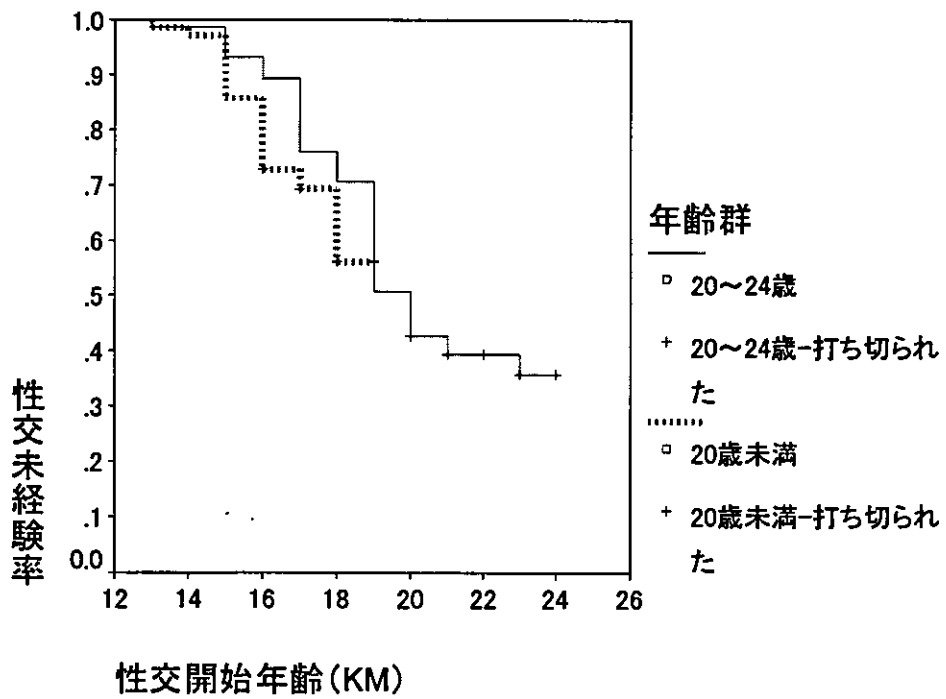


図18. 20-24歳群と20歳未満群



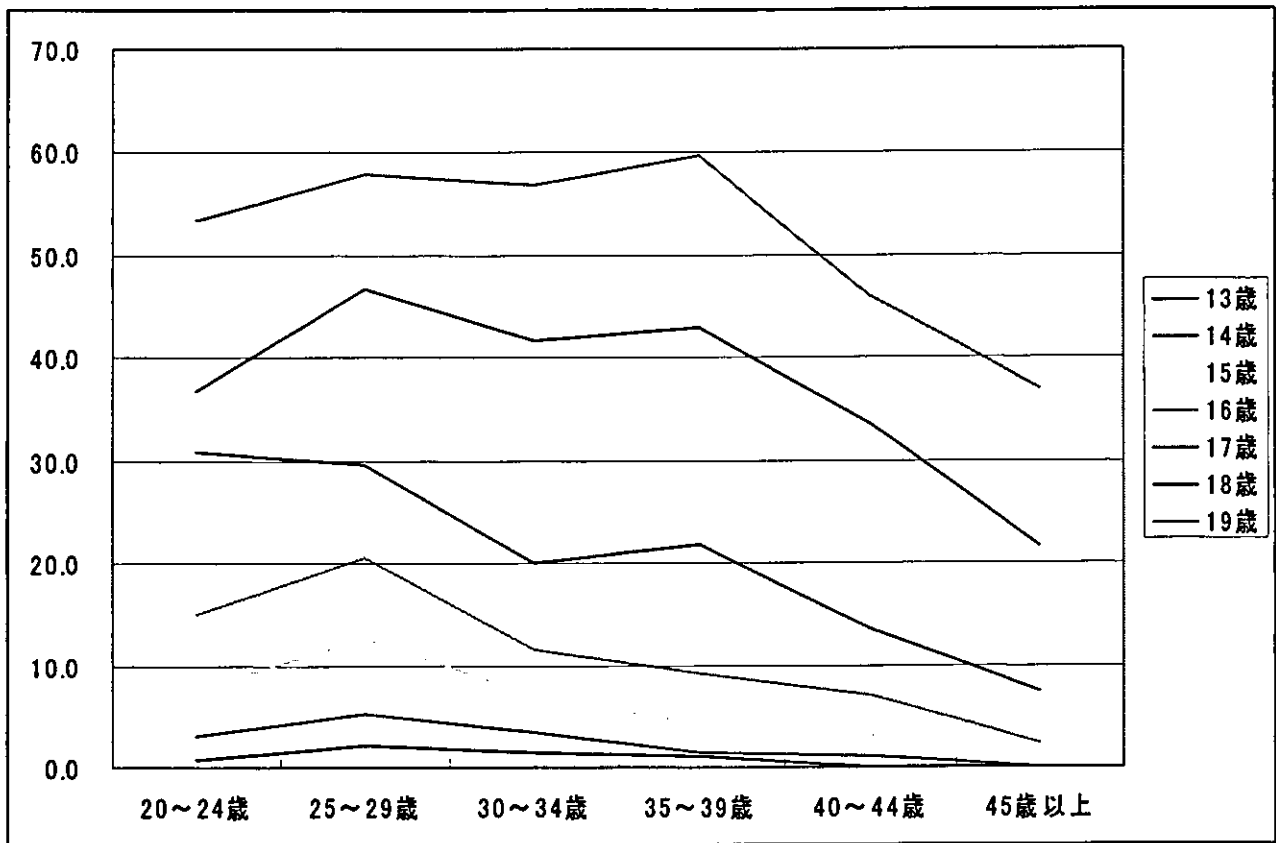


図19. 各年齢時点における累積性交経験率（打ち切りデータ考慮） 男性+女性

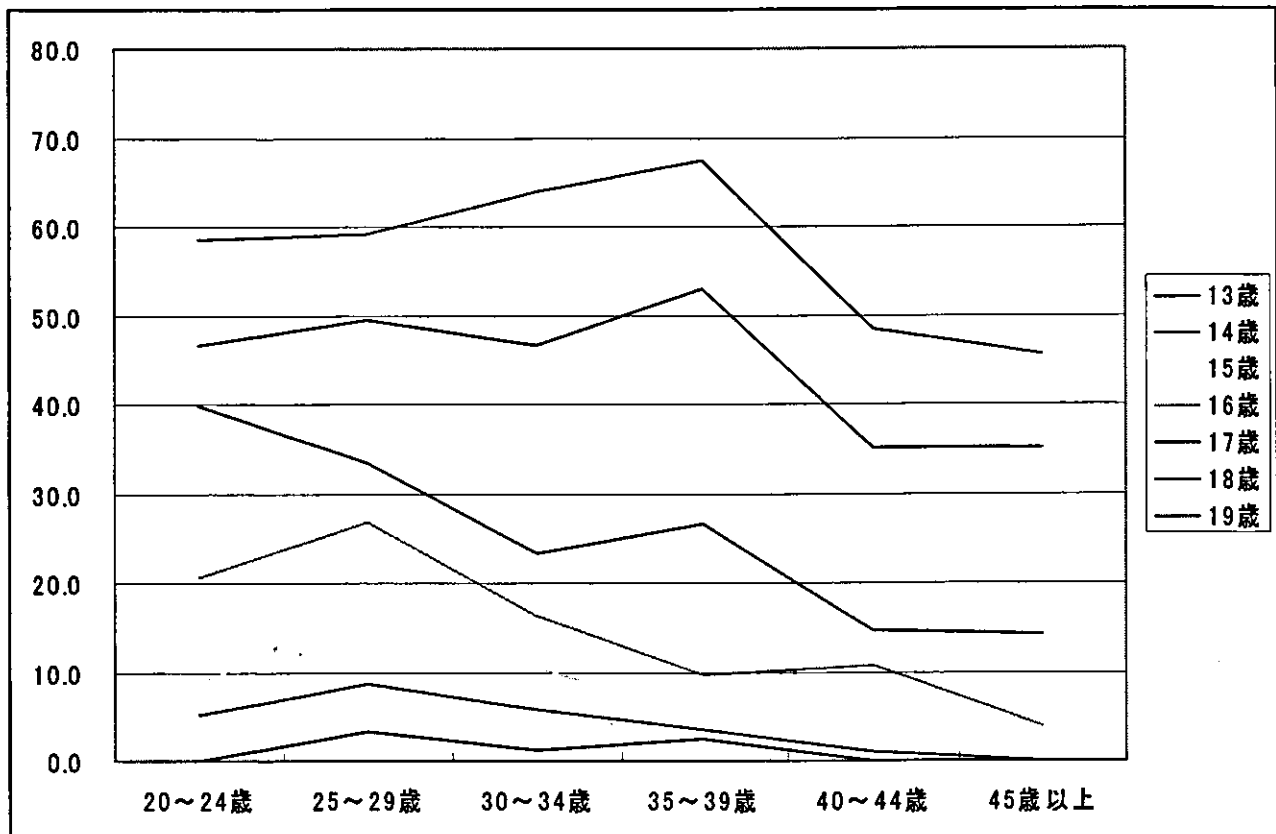


図20. 各年齢時点における累積性交経験率（打ち切りデータ考慮） 男性

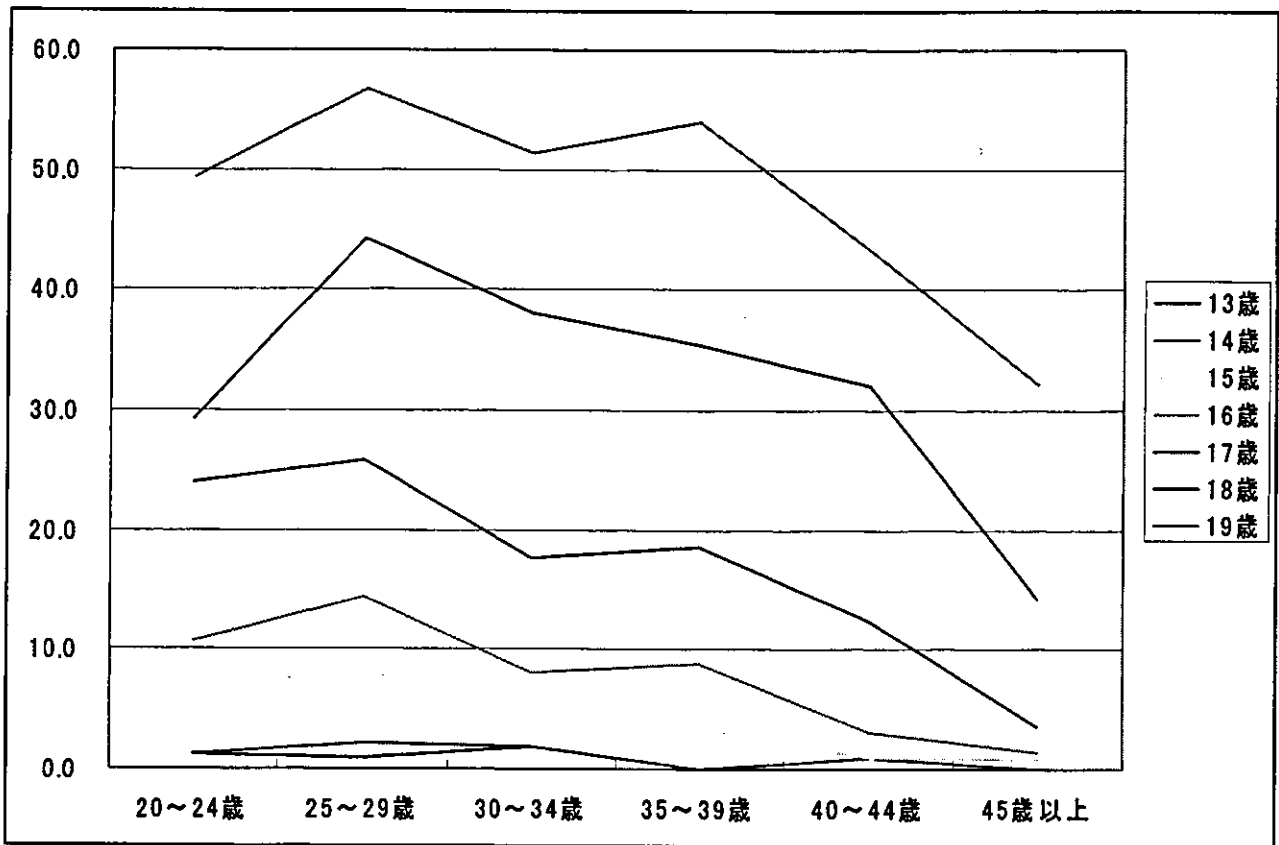


図2 1. 各年齢時点における累積性交経験率（打ち切りデータ考慮） 女性

各年齢層別の性交開始年齢・尖度

年齢群	男+女	男	女
20歳未満	0.146	0.234	0.096
20～24歳	-0.051	-0.114	0.454
25～29歳	0.910	0.682	1.053
30～34歳	2.584	2.783	1.934
35～39歳	2.683	5.676	1.310
40～44歳	9.641	10.822	0.808
45歳以上	2.032	1.911	2.033

male + female

全国無作為抽出調査,2002

29

図2 2. 各年齢層別の性交開始年齢の分布（尖度）

十代分娩の特性に関する研究

～十代出産の多いエリアにおけるデータ分析～

田上 裕子	田川市立病院・リプロの会
井上 美鈴	田川市立病院・リプロの会
林 昭子	田川市立病院・リプロの会
本田美祐紀	田川市立病院・リプロの会
高崎 望	田川市立病院・リプロの会
小林寿美子	田川市立病院・リプロの会
樋口 善之	福岡県立大学看護学部地域・国際看護学講座
松浦 賢長	福岡県立大学看護学部地域・国際看護学講座

十代分娩の特性を把握するため、十代出産の多い地域にある病院における、平成 15 年度の分娩台帳・外来カルテ等から、十代の全分娩例に関する情報を分析した。その結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 18 歳分娩例のうち経産が過半数を占めていた。
- (2) 経産例には中絶を経験したものはいなかった。
- (3) 16～17 歳で分娩した者（全例初産）のうち、約 30%が中絶を経験していた。
- (4) 18 歳経産例のほとんどは、17 歳で第 1 子を出産していた。
- (5) 17 歳以下の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は 16.7%であったが、分娩時には 58.3%が既婚者であった。
- (6) 18～19 歳の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は 61.1%であった、分娩時には 94.4%が既婚者であった。
- (7) 初産例においては、初診時の妊娠週数が 22 週をこえるものが 18%いた。
- (8) 妊婦健診については受診状況は総じて良好であったが、母親学級を受講したものは少数であった。
- (9) 初産例に喫煙しているものが 59%と多かった。

Ⅰ. はじめに

本稿では、十代で分娩したものの特性に焦点をあてる。十代の分娩が全国でも多いエリアにある病院の平成 15 年度の記録を分析する。

福岡県は人工妊娠中絶数が多い県である。さらに福岡県内の平成 8～10 年の田川市郡のデータを見ると全出生に占める 20 歳未満の母親の出生割合は 6.08%であり、福岡県の 1.96%、全国の 1.45%と比較しても高い。また、20 歳未満の人工妊娠中絶に関しても平成 10 年の福岡県の 11.0(女子人口千対)に比して田川地区は 16.6 と高かった。このように田川市郡の 10 代出産、人工妊娠中絶は全

国の平均と比較して高い状況にある。

今回は、その地域にある大規模病院のうち、A 病院にて分娩した十代の特性について分析することにした。同病院がカバーする田川市郡の外観を図 1 に示した。

Ⅱ. 対象と方法

福岡県田川市にある A 病院における平成 15 年度の分娩台帳・外来カルテ等から、十代の全分娩例に関する情報を分析した。分析の対象となった変数は、全分娩に占める割合、初診時妊娠週数、妊娠出産歴、人工妊娠中絶歴、婚姻状況、喫煙状

況、飲酒状況、STI、母親学級受講、健診受診、等である。

Ⅲ. 結果および考察

1. 妊娠出産歴

図2に、平成15年における十代全分娩例の妊娠出産歴を示した。

まず、平成15年度の分娩総数は468例であり、全分娩に占める十代分娩の割合は6.4%であることがわかった。

十代分娩例の初産の割合をみると、初産22例(73.3%)、経産8例(26.7%)であった。14歳から17歳までの分娩は、すべて初産であった。一方、18歳、19歳における分娩は、そのうちの44.4%が経産であることが明らかになった。

2. 人工妊娠中絶歴

十代分娩例の、中絶経験の有無を見ると初産22例中5例(22.7%)に中絶経験がみられた一方で、経産8例においては中絶経験があるものは皆無であった。

16歳～17歳で分娩した者(全例初産)のうち、約30%に中絶経験がみられた。

3. 経産例における初産時年齢

18歳から19歳の経産例8例の、初産時年齢を図4にまとめた。ほとんどが第1子出産後1年で第2子を出産していることがわかった。

4. 婚姻状況

17歳以下の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は16.7%であった。分娩時には58.3%が既婚者であった。17歳以下の母親の約4割が未婚であることが明らかとなった。

18歳、19歳の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は61.1%であった。分娩時には94.4%が既婚者であった。

5. 初診時の妊娠週数

初産例においては、12週未満が6例(27.3%)、12-22週未満が11例(50.0%)、22週以降が4例(18.2%)であった。

経産例においては、12週未満が5例(62.5%)、12-22週未満が2例(25.0%)、22週以降が1例

(12.5%)であった。

6. 妊婦健診回数・母親学級受講

A病院での妊婦健診スケジュールであるが、12週、16週、20週(胎児スクリーニング)、24週、27週、33週、35週、37週、以降週1回、となっている。

初産例では、健診回数が5回未満のものは5例(22.7%)、5-9回のものは7例(31.8%)、10回以上のものは10例(45.5%)であった。

経産例では、健診回数が5回未満のものは皆無、5-9回のものは3例(37.5%)、10回以上のものは5例(62.5%)であった。

母親学級を未受講のものは、初産で16例(72.7%)、経産で4例(50.0%)であった。

7. STI・喫煙状況

A病院ではSTIに関しては全例検査をおこなっていない。何らかの訴えがあった場合に検査をおこなっている。

任意の申し出による検査にてSTIに罹患しているとわかったものは、初産では3例(13.6%)、経産では1例(12.5%)であった。

喫煙状況であるが、喫煙しているものは、初産では13例(59.1%)、経産では2例(25.0%)であった。有意な傾向があった。

飲酒については1名のみが該当した。

Ⅳ. まとめ

以下のことが明らかになった。

(1) 18歳分娩例のうち経産が過半数を占めていた。

(2) 経産例には中絶を経験したものはいなかった。

(3) 16～17歳で分娩した者(全例初産)のうち、約30%が中絶を経験していた。

(4) 18歳経産例のほとんどは、17歳で第1子を出産していた。

(5) 17歳以下の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は16.7%であったが、分娩時には58.3%が既婚者であった。

(6) 18～19歳の分娩例のうち、妊娠時、既婚者は61.1%であった、分娩時には94.4%が既婚者であった。

(7) 初産例においては、初診時の妊娠週数が 22 週をこえるものが 18%いた。

(8) 妊婦健診については受診状況は総じて良好であったが、母親学級を受講したものは少数であった。

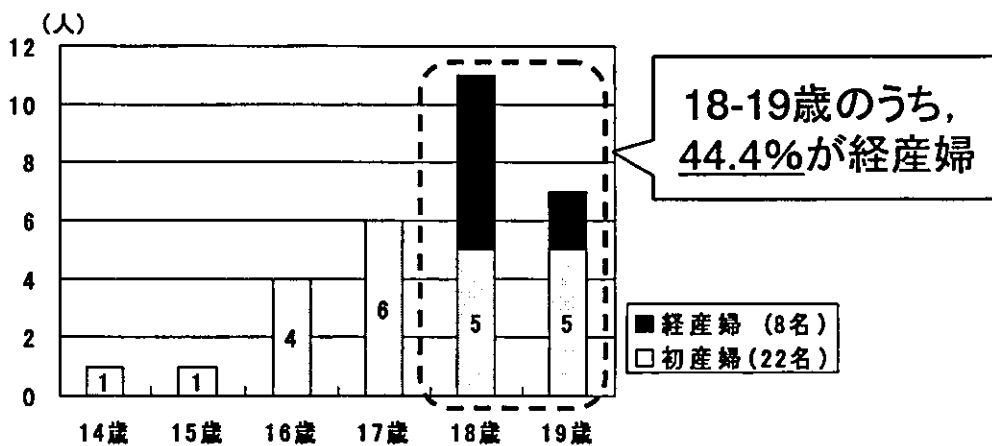
(9) 初産例に喫煙しているものが 59%と多かった。

田川市郡

- 構成自治体: 1市8町1村
- 人口規模: 15万人
- 出生数: 1200人
- 生活保護率: 9.2%
- 大規模病院数: 2施設(産科ベッド数計57床)
- 10代の出生, 中絶に関する統計
 - 出生割合 6.5%(対全出生)
 - 中絶割合 24.5%(対全中絶)
 - 出生率 17.35 (対10代後半女子人口)
 - 中絶率 17.79 (対10代後半女子人口)

図1. 田川市郡の人口学的概要

平成15年度の10代分娩数の内訳(30例)



※ 分娩総数: 468例 (初産婦=73.3%, 経産婦=26.7%)
全分娩に占める10代の割合: 6.4%

図2. 妊娠出産歴

10代分娩例(30例)における中絶経験

	初産		経産	
	分娩数	うち中絶経験者(%)	分娩数	うち中絶経験者(%)
14歳	1	0	0	
15歳	1	0	0	
16歳	4	1 (25.0%)	0	
17歳	6	2 (33.3%)	0	
18歳	5	0	6	0
19歳	5	2 (40.0%)	2	0
合計	22	5 (22.7%)	8	0 (0%)

図3. 人工妊娠中絶歴

経産(8例)の初産時年齢

初産時の年齢	経産時の年齢(初診週数)
18	19 (9週)
18	19 (11週)
17	18 (26週)
17	18 (8週)
17	(15歳で子宮外妊娠)
17	18 (9週)
17	18 (17週)
16	18 (11週)
不明	18 (17週)

図4. 経産例における初産時年齢

小学校におけるカフェテリア方式による性教育実践に関する研究 ～2回の授業実践より～

江崎 和子 京都市立崇仁小学校
松浦 賢長 福岡県立大学看護学部地域国際看護学

最近モデル開発された、性行動を低リスクに導くことを主目的とするカフェテリア方式による性教育に注目し試験的に実践適用した。その可能性について検討し、以下のことが明らかになったり、示唆された。

カフェテリア方式で児童がテーマを選ぶことにより約8割（78.3%）の児童が興味関心、及び授業に前向きな姿勢や心構えを示した。

児童が選んだテーマでは、4年生児童の約半数（45.5%）は“性”以外のテーマを、男子の約4割（42.9%）が男子の二次性徴のテーマを選んだ。

保護者が選んだテーマでは、約4割（41.4%）がいのちの関するテーマを、女子の保護者の約4割が女子の二次性徴のテーマを選んだ。

カフェテリア方式の性教育は概ね保護者や担当者の賛同を得られた。

カフェテリア方式による性教育は個別、小集団学習による授業で、児童はそれぞれの思いをだすことができたと思われる。

I. 研究の目的

文部科学省の「学校における性教育の考え方、進め方」においては、学校における性教育の目的は「人格の完成、豊かな人間形成」であり、平成14年度版ではさらに「適切な意思決定や行動選択ができる」ということが加えられている。

しかし、このような目的は近年性行動に起因する問題（妊娠・中絶・性感染症等）や課題には見合ったものでないことが少しずつ理解されるようになってきた。すなわち、基本の概念から組み直された新しい性教育が求められるようになってきている。

一方で、2004年5月には文部科学省によって、学校における性教育はクラス単位の集団教育を重視する時代から、個別指導を重視する時代となっていく方向性が示された。

このような中で、最近モデル開発された、性行動を低リスクに導くことを主目的とする、カフェテリア方式（資料1）による性教育に注目し、試験的に実践適用し、その可能性について探ることにした。

II. 研究の方法

1. 対象

京都市立崇仁小学校4～6年 29名
(女子15名 男子14名)

2. 方法

この実践モデルを開発した共同研究者の松浦にアドバイザーを依頼した。

カフェテリア方式による性教育の条件は以下の通りである。

- ①学校指導要領等、学校における教育範囲を逸脱しないこと
- ②保護者の人権を尊重すること
 - a. 事前に個別に了解を得る。得られない場合は、別の健康教育メニューを用意。
- ③クラス単位の集団性教育と個別指導の中間形態であること
 - a. 最低でもクラスの枠を取り払う。学年の枠も可能
- ④多数の教員がかかわること
 - a. 子どもたちへのメッセージ環境を構